WEBRONZA

宗教の違いを超えた音楽の可能性

ベラ・アンサンブル『Music for the one God』の平和への希望

中東生

2015年02月21日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

偶然なのか、必然なのか。世界中を震撼させたフランス連続テロ事件直後の2015年1月18日、ミュンヘンのフィルハーモニー・ガスタイクホールで、ユダヤ教とキリスト教、そしてイスラム教の3つの宗教曲を融合させた、ペラ・アンサンブルのプログラム『Music for the one God』が披露された。

民族楽器の縦笛ネイを吹くヴォルカン・イルマツと、ソリストのサラー・エゴ

この企画は2012年にアナウンスされている。当時、既に危機感を感じていたペラ・アンサンブルが「現在は異なる宗教として対立感が増すばかりのキリスト教、ユダヤ教、イスラム教は実は同じ根源を持つということを再認識して、お互いを尊重し合わなければならない」と、音楽的共存を体現するために創り上げた。

イスタンブール、ザールブリュッケン、ミュンヘンと回って得た成功を受けて、より大規模に展開させた新しい『Music for the one God』を発表する時に、それがここまで必要な世の中になっているとは、彼らにとっても残念な驚きだったという。

ペラ・アンサンブルはトルコ出身のマホメッド・イェシルケイが結成したグループで、著名な音楽祭でも認められる高い音楽性を持つ。彼らが目をつけたのは、キリスト教を背景に持つバロック音楽も、ユダヤ教の宗教音楽も、イスラム音楽と共通の、オスマン帝国にルーツを持つという点である。

この3種の音楽を上手く組み合わせたプログラムは世界で唯一のものだという。「同化させたいのではなく、同じ高さの目線で対峙させたいのです」

と1959年生まれのイェシルケイ氏は語る。彼らは2012年にドイツを代表する音楽賞、エコー賞の『境界線を越えたクラッシック』賞を受賞している。

ペラ・アンサンブルの代表マヘメット・イェシルケイ（右）が奏でるウズとタンブール（左）

ガスタイクホールでの大コンサートに先駆け、1月16日にはまずミュンヘンの百貨店Beck最上階にある音楽フロアでのミニコンサートが企画された。

セキュリティの人員を各所に配置するという重々しさだったが、聴衆は民族楽器などに興味を示しながら、宗教の壁を意識せずに、純粋に音楽の響きを楽しんでいた。CD購入者へのサイン会も開かれ、そこで交わされていた会話からも、人々の関心の高さが分かった。

翌日17日には、18日のコンサートチケットを手に入れられなかった人たちのために、特別コンサートが企画されるという勢いであった。そうして迎えた18日のコンサートは、総勢160人ほどの出演者がエキサイティングなステージを見せた。

コンサートのオープニングには司会者が登場し、次のようなコメントを述べて満場の拍手に支持された。

「このコンサートは残念ながら、とてもタイムリーなものとなってしまいました。テロリストが簡単に人命を奪うこんな時代には、何らかの指針を示さなければなりません。このコンサートは大切なメッセージを伝えます。タイトルのoneは、私達の社会が一つになるという意味も含んでいます。私達の神が何という名前で呼ばれていようと、どんな祝日を祝おうと、何を信じ

ていようと、一つになれる社会。他宗教を許容するのではなく、ただ敬意を払うことが必要なのです」

セマーゼンと呼ばれるダンサー達

まずコーラン詠唱でコンサートが始まり、そこに13世紀のキリスト教音楽が自然に響き始める。それは不思議なほど違和感がない。イスラムの民族楽器とクラッシック音楽の楽器が混じって響く音色は、まさしく奇跡的だ。

その後にはフラメンコを思わせる手つきで踊りながら歌うユダヤ音楽が続く。次の曲では、見た目は縦笛なのだが、音色はサクスフォンのようなネイの伴奏で、アラムの教会音楽が歌われる。続いてイタリア人ソプラノが、『もののけ姫』の主題歌を思い出させるような、バルセロナの修道院所蔵の曲を、尺八をハイカラにしたような枯れた音色の笛、メイとともに歌って応える。

そこへ僧侶のような出で立ちの男性が5人登場し、おもむろに黒いマントを脱ぎ、白い衣装で踊り始める。それはロシアのコザックダンスのようでもあり、衣装の裾が広がる様は、バレエ『くるみ割り人形』の花のワルツのようでもある。カウンターテナーのフィリッポ・ミネッチャが歌うヴィヴァルディの「ラクリモーザ」で、また西洋へ引き戻された頃には、聴き手の方にも境界線を越える意識がなくなり、彼らの世界へどっぷりはまったままコンサートが終了した。

笛ともども特筆すべきなのは、まずリーダーのイェシルケイ氏が担当するウズ（木製の中世リュート）だろう。西洋リュートの祖先だというこの楽器は、ギターよりもふわっと広がる音色が高原を想像させ、人類の起源にまで遡る懐かしさだ。

カーヌンは、彼らによると「日本の琴と同族」という楽器だが、こちらは約80本の弦を持つ、10世紀から伝わる楽器で、当初は羊の腸から作られた弦だったそうだ。現在はもちろんナイロン製である。彼らが琴と比べる通り、日本人にも馴染みやすい音色だ。そして驚くほど人間の肉声に近いマンドリンのような姿の楽器がケメンチャだ。これらの楽器は、宗教や人種を越えた人類の遺産のように響く。

あまりにも自然に紡ぎ合う3つの宗教音楽は、その中のどの宗教にも属さ

ない者に一種の嫉妬すら抱かせるほどの仲睦まじさ。そこで思わず「なぜ仏教が出て来ないのか」という質問を投げかけてみた。「一緒に文化を発展させたことがないから」と簡単に答えられてしまったが、それは仏教が排他的でなく、意識されずに様々な文化と既に混ざり合っている証拠なのかもしれない。

最後に「本当にこのような企画を通して、世界に平和をもたらす事ができると信じているのですか？」と思い切って聞いてみた。イェシルケイ氏は確信を持って答えた。「信じるもなにも、共存できていた時代があるのだから、その記憶を呼び起こさせるだけでいい。イスラム音楽からヨーロッパのバロック音楽も発展していったという事実を通して、過去を思い出し、一つになって欲しい」

今後、この豪華版『Music for the one God』 はイスタンブール、ケルン、サラエボ、ウィーンへの招聘が打診されている。このような企画が世界を包み、平和を創ってくれることを願って、人々はこれだけ集まって来るのであろう。

日本も人質事件で悲しい被害者を出してしまったことについて、彼らはこう語る。「日本人捕虜の事件は、宗教が悪用された恐ろしい事件です。私達の宗教において殺人を説く事はありません。それをする者はイスラム教徒でないだけではなく、人間ですらありません。これは日本にとっての悲劇ですが、世界の残りの国にとっても同じく悲劇だと思います」

有史以来、世界をどんどん巻き込んでいった宗教間の争いに、私たち日本人は今後どのように向き合っていけばよいのか。その葛藤の中で生まれた『Music for the one God』 は言葉で表せない答えを提示しているように思える。

Global Press のサイトはこちら

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.